



利根山光人

Toneyama Kojin

第90号 平成28年6月1日

記念美術館通信

Memorial Art Museum News Letter

〒024-0043 岩手県北上市立花 15-153-2

TEL/FAX 0197-65-1808

利根山光人記念美術館 平成28年度企画展開催中 利根山光人 — 新所蔵作品展 —

平成28年6月18日(土)～8月25日(木)

※8月26日(金)展示替えのため休館

今回は前期企画展から展示替えをし、利根山彌恵子夫人から寄贈頂きました当市未公開作品の中から、「戦争」をテーマに描かれた作品を中心に展示します。

利根山光人画伯は、青春時代に戦争を経験しています。今回展示する「ヒロシマシリーズ」「ナガサキシリーズ」「南京シリーズ」などの白黒で描かれた版画作品の数々は、「戦争を風化させてはならない、描き残しておかなくてはならない。」そんな画伯の強い思いが感じられ、「戦争とは何か」を見る者に訴えかけてきます。

また、日本各地の祭りを描いた作品も展示します。画伯が実際に見て感じた祭りの数々を、ぜひお楽しみください。



ヒロシマシリーズ A.M.8.15

『遺したい北上の風景画』



広表橋からの夕日

夕日を追うように車を走らせ、シャッターを切る場所を探しました。江釣子球場のそばにある広表橋を通過し、ここだ！と見つけることができ戻って橋上でシャッターを切った写真を絵にしたものです。

昨年、北上市主催の絵画教室を受講し、初めて油絵に挑戦しました。大らかな千田先生の御指導で描くことの楽しさを学びました。先生からは色々なことを教わりましたが、「ぼやーっと描くとはっきり見える」という言葉に、難しいと思いましたが、納得できました。

ちなみに私の母が子供の頃、着物を着て広表橋の渡り初めをしたとか・・・。

高橋 浩生さん

(利根山光人記念美術館光の会)

早稲田学報



1979 2-3

早稲田学報 2・3月号
(1979)

『早稲田学報』とは早稲田大学校友会が発行している会報であり、利根山光人画伯は数年その表紙を描いていました。「鶴女房」や「桃太郎」などの民話シリーズのほか、全国各地のスケッチなどが描かれています。今回はその中から、昭和54年3月15日発行表紙「天壇」の「表紙のことば」として画伯が書いた文章を紹介します。

「北京の浅春はかなり肌寒い。中国の現代建築はソ連の影響なのかいやに天井が高くどうしてもかつて梅原(龍三郎)先生の描いた故宮や天壇の中国本来の伝統的な建築に画心がそそられる。ことにかつて皇帝が豊作を祈願したという祈年殿の扁額をつけた三重円形の建物は何度も足を運んで描いてみたくなる。

私がパステルでスケッチしていると湖北美術院のメンバーだという蔡さん外二名が油彩で描いていた。この間その蔡さんから天壇で会って深い印象をうけたと綿々と綴った手紙を頂いた。中国ではパステルを粉筆と書くらしく文面にはできれば貴方の原画または複製品を送ってくれと書いてあった。私は早速私のスケッチ画集「装飾古墳」と粉筆(パステル)一箱をそえてとりあえず送ったばかりである。」

—利根山光人記念美術館と私—

今こじつけて考えてみると、私は今まで水、板(木)、土(岩等)をよく描いていた気がします。

そして、描くと決めてから何年も眺めてからでないで描けないのが普通になっていました。

4月から11月まで美術館に通ってみると、季節や朝昼夕によって風景や、自分の顔が変わったことに気がつきます。そして、風景が「2年間も通って眺めてきたのだから、いい加減に俺を描け・・・」と泣きついてきたような気がしました。だから私は「しょうがないから描いてやるか」と思い立って描いた絵がこの絵(右記)です。

ところが風景から「ぜんぜん似てないし、もっと良い顔してるよ」といわれているような気がします。いつになったら通じ合うのかなあ。

さて話は変わりますが、時々来館者の中に「地元(立花)だけど、下の道路はしょっちゅう通っているが、残念ながら美術館の存在は知らなかった」とか「初めてです」と言われます。

どうぞ絵に関心のない方でも、最初は風景を眺めるような気持ちで来てみてください。北上駅や桜並木、農作業風景等が一望できるよいところです。毎年、美術館では企画展を開催し、絵の展示替えも行っていますので、そのうちに、少し美術館の中に入ってみようかな?と思うはずです。お気軽にお越しください。お待ちしております。

高橋 平光

(利根山光人記念美術館専任研究員)

